

## オットー・ガイヤーによるベルリン旧ナショナルギャラリーのフリーズに関する考察

三井 麻央（岡山大学）

---

ドイツの彫刻家オットー・ガイヤー（Otto Geyer, 1843-1914）によるフリーズ（1870-75）は、ベルリン旧ナショナルギャラリーの開館にあわせて制作された。館内の階段吹き抜けを囲う壁に沿うように、四面にわたって設置されているフリーズの画面には、ゲルマン部族の英雄アルミニウスを始点に、ゲルマニアの擬人像を終点として、古代から19世紀末までの100名以上にも及ぶ「ドイツの英雄」が左から右へと、ほぼ時系列順に描かれている。アルミニウスとゲルマニアの間に描かれた人物は、アルブレヒト・デューラーをはじめとする造形芸術家のほか、音楽や文学など他領域の芸術家、さらには歴代のプロイセン国王や哲学者、科学者など多岐にわたり、鑑賞者は歩を進めながらドイツ史の流れを目することになる。

旧ナショナルギャラリーはドイツ帝国の統一と同時期に、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世（Friedrich Wilhelm IV, 在位1840-1861）の命により1866年に建設が開始され、1876年に開館した。そのため旧ナショナルギャラリーは、1871年に新たに成立した帝国と密接な関係を持ちながら、文化的中心地としての役割を担わされている。ガイヤーのフリーズもまた、ドイツ帝国および美術館全体のプログラムの一部として、あるいは宮廷芸術家ガイヤーの業績の一部として一定の言及がなされてきた。しかし、描かれた芸術家や他領域の人物像との連関のなかで果たす役割については未だ考察の余地があるといえよう。

本発表では、作品そのものより緻密な分析を通して、ガイヤーのフリーズがあらわす「ドイツ史」がいかなるものであったのか明らかにすることを試みる。19世紀の西欧では美術館装飾や記念碑によって自国の芸術を顕彰する作例は多く存在するが、とりわけ美術館装飾の例として、ドイツ語圏の芸術家の彫像を館外装飾に用いたミュンヘンのアルテ・ピナコテーク、多領域の「ドイツの英雄」の胸像を多数設置した例としてレーゲンスブルクのヴァルハラを比較対象に取り上げる。これらは多数の「ドイツの英雄」像を扱う点で共通するが、ガイヤーの場合、フリーズによってより多くの人物を扱い、それぞれの像の間に繋がりをもたせ、全体でひとつの連なった歴史をあらわすという特性をもつ。

また、すべての人物像は奥行と大きさの変化によって、また人物像のなす群とその構図によってそれぞれ強弱がつけられているために、「偉大なドイツ人」の歴史に造形芸術家を自然なかたちで組み入れ、その地位の正当性を鑑賞者に示すことを可能としている。つまりガイヤーのフリーズは造形芸術家のドイツ史での立ち位置を示した作品であると発表者は考える。鑑賞者はガイヤーの意図的に示した歴史を、階段吹き抜けという設置場所の特性によって、自らの身体の動きとともに学ぶこととなる。